
メルジーネの羊水

カトウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メルジーネの羊水

【Nコード】

N3929D

【作者名】

カトウ

【あらすじ】

監視される都市。戦場でトラブルをおこし『犬』へとリサイクルされた主人公ガザ。友人クガの恋人、フィアと出会い、その妄念にとり憑かれる。操作される意識、それでも溶け合う事のない精神の行く末は？

第一章1（前書き）

登場人物・組織・用語

【ガザ】

主人公。元兵士。

【リリウム】

元軍人で、ガザの同僚。

【ファイア】

クガの恋人。嘘つき。

一度ハマったら抜け出せない。他人まで不幸にする泥沼のような女。

【クガ】

ガザの友人で、元兵士。

クーガ（ピューマ）をもじって。

【セアト】

ファイアの異父兄。

【ファナ】

セアトとフィアの妹。

【キアラ】

サイドストーリー「アルカイツクスマイル」の軸になる人物。姓はシーブリング。父親が民主党の上院議員。オシリス社の現会長は父の従兄弟である。

【グレイン】

ガザ達の上官。

【キース】

フィアの父親。脳医学博士。

【トレバー】

電警幹部。

【dog】

連邦政府にとって邪魔な存在や情報の消去を担う組織。表だって公表されていないせいなのか、正式名称はない。軍や連警にも属さず、独立した組織となっている。幹部はともかく、手足となる末端構成員は、社会から外れたもののリサイクルで、人権も剥奪されている。

つまり、彼らは、都合のよい捨て駒である。

そんな、この組織を皮肉る形でdogと呼ぶのだろうが、最近は大犬のほづが大事にされているに違いない。少数先鋭。

【アイシス】

連邦のセキュリティを担う、システムの名称。連邦政府の安全を監視する。

古代エジプト、最高位の女神から名前を取った。豊穡の女神。

【オシリス社】

娯楽から兵器までと、幅広い分野に手を出す、連邦一の巨大な企業。古代エジプトの神から名前を取った。死と復活を司る。

【連警】

連邦警察の略。

【電警】

電子警察の略。

元はネット犯罪を取締まる連警の一部門にすぎなかったが、5年前のアイシスの導入に伴い独立。アイシスの情報管理が、主な役目。殆どの捜査、犯人の逮捕等は連警が行なうが、連邦の警備システムはアイシスが司っている為、連警よりも発言力が強い場合も。

【キセニア戦争】

三十年以上前に勃発した、連邦と東方のキセニア、クルスカ、カス

ティユの三国との戦争。

開始から一年で、連邦政府は勝利を公式に宣言したが、テロやゲリラにと混戦が続いた。今だに終わっていないとゆう声もある。

第一章 1

ビルの周りをゆったりと飛ぶ銀色の翼竜の鱗が、サーチライトを受けてキラキラ光った。

ガラス越しから翼竜と目が合う。

巨大な爬虫類の瞳は、瞬きをする事もなく、ガザ達を見つめると、笑うように口の両端を上げた。

獰猛な笑顔。

普段なら、不法侵入、暴行罪で、吐き出される炎に焼かれても、文句は言えない状況だが、翼竜はそのままガザ達から離れ、次の警備場所へと優雅に翼をはばたかせて離れていった。

オシリス社のハイブリッド工学を駆使して作られたこの兵器は、街の警備の為に作られた。

人の目を楽しませ、時には威嚇する為の姿だ。この兵器は意志がなくても美しい。兵器とは、そういうものなのかもしれない。

はがいじめにされている男を改めて見ると、どこか思い当たる節がある。

顔を近づけると、男は顔を歪ませて叫び声を上げた。否、上げようとした。声が出なかったのは、男の自由を奪っている、赤毛の女が口を塞いだせいだ。

「何、グズグズしてるのよ、時間がないわ」

ガザは男の目蓋を押さえ、手にしていた長さ20センチ程ある太い針を、眼球の目頭に近い部分に深く刺した。

針は骨に当たらず、脳に到達する。

男は一瞬、声を上げたが、すぐに大人しくなった。

女はそれを見届けると、口を押さえていた手を離し、腕時計に目をやった。

ガザは、やることが無くなり、大きな窓から外の景色を眺めた。

ビルの谷間を流れるように、車のライトが光の線を描きながら走っている。

空に星は見えないが、夜景は美しい。このフロアは確か65階。ここからの眺め、地上を見下すような気分は、なかなかいいものだったのだろう。

この男は、これから先、この景色を見てそう感じることもあるのだろうか？

ふと、マホガニーのワーキングディスクに目を止める。仕事で使う端末の他に電子フォトスタンドが幾つか飾ってあった。

女が男の首に二本の注射を手早く打つと、男の体が徐々に変化しはじめた。

仕立ての良いスーツを突き破るように、脂肪が膨張し、フワアと茶色の毛が全身に生えて、顔も獣じみてくる。

「…猪豚みたい」

女は男の変化する姿を無感情に見つめながら呟いた。

「でも何故、脳を傷つけるだけじゃなくて、こんな事までしなくちゃいけないわけ？」

女は、力を失った、さっきまで人間だった半獣を乱暴に蹴飛ばし、苦々しく吐き捨てるように言った。

「知らない、本部からの命令だ」

ガザはフォトスタンドの赤ん坊の写真に目をやりながら答えた。

「…いつもそうだわ。」

ガザはしょうがなく付け加える。

「変態の犯行に見せかける為だろう。推測だけど」

「どうせ何もかも、もみ消されるように、情報操作されるわけですよ。」

なんで、変態の真似事しなくちゃいけないわけ」

女の声は小さく、そして震えていた。今にも泣きだしそうだった。

「おい、時間がないんだろ、行くぞ。」

区内の警備システムが正常になるまで、あと15分だ。竜に焼かれる前にずらかろう」

第一章 2

ガザ達はポータルブルジェットを使い、ビルの窓から飛び降りた。わざと、出力を弱くして、飛び降りると、体を切るような風と空気の流れを全身に感じる事ができて気持ち良かった。空にダイブする気分は最高だった。

地面から20Mを切った所で、出力を最大にして負荷を和らげた。それを徐々に弱くして地面にふわりと着地する。

タイミングがずれたら、地面に叩きつけられてしまうが、そのスリルも爽快でたまらなかった。

「そんなことをしたら、目立つわよ」

赤毛の女はガザとは違い、規定の出力で降りてきているせいか、まだ、宙にういたままだった。

「これぐらい遊んでもバチは当たらない」

「命知らずね」

赤毛の女は、半ば呆れたように言いながら着地した。正気の沙汰じゃないとも言いたげだった。

地下駐車場に『用意されていた』車に乗り込み、ガザが運転席に座り、女は助手席に座った。

車を発進させ、暫らく沈黙が続いていたが、ウィンドウの夜景を物憂げに見ていた女が、思い出したように口を開いた。

「今日のターゲット知り合い？」

「知り合いってゆう程でもないさ、本部で2、3回かな？会ったくらい」

「思い出した。何処かで見たことある気がしたのよ。元本部のおエライさんだわ。二年前に会った。

あの年なら奥さんも子供もいるわよね」

ガザはフォトスタンドに飾ってあった、あの幸せそうな赤ん坊を思い出す。

その笑顔が脳裏にこびりつき、何故か不快でたまらなくなった。思わず、ステアリングを握る手に力が入る。

「あの歳なら、孫もいるかもよ。まだ、死んでないだけマシだ」

「でも、死んでるのと同じだわ。あんな姿にさせられて、おまけにロボットミイなもの。まともにオシャベリさえ出来ないわ」

ガザは鼻で笑った。

感傷的になって喋っている女は、その男をさつき蹴飛ばしたばかりなのに。

「感傷的になってちゃ、この先、生きていけない」

「なるわよ！毎回、毎回こんな事させられて。あんだ、よく冷静でいられるわね！」

「ヒステリーは、やめてくれ」

女は口を閉じたが、また泣きそうな顔をしたので、ガザは仕方なく喋りだした。

「元本部のおエライさんだつて、こういう目にあうんだ。俺達なんかは、いつそうなつてもおかしくない。ロボットミィならまだマシだ。間違いなく俺達なら殺される。もっと、ひどい目にあわされて」

フォローにもなっていないが、ガザが言えるのは事実だけだった。

「……そうね、その通りだわ。」

で、あんた連邦の出身じゃないわよね。帰化したの？ そういえば、前の任務も一緒だったけど、名前も知らないわ」

女の口調は、後半は能天気な程、明るい口調になっていた。ガザは不愉快でたまらなくなった。

コイツも、もう駄目だ。

次か、次の任務が終わるか終わらないかで、ターゲットでなく自分の頭をブチぬく。

彼と任務と一緒にこなしてきた『同僚達』のほとんどが長続きしない。五年以上もこの仕事を続けてられる人間のほうが珍しいようだった。

『消えた』同僚達は何故か同じような変化を見せた。最初は思い詰めたような表情。ヒステリー。一転したように異常な程明るく振る舞う。そして消えてる。

自分で死んだのか、殺されたのかは、彼には分からなかったが。

「ガザだ。出身はカステイユ」

「カステイユ！それは、それは、また……。でも、カステイユ人には見えないわね」

「混血なんだ」

「あそこは、今でもヒドイ有様らしいわね」

「帰化してから行ったことないんだ」

「私はリリウム。よろしくね」

笑うと気の強そうな目元が優しくなり、魅力的に見えたが、その取って付けたような笑顔より、泣きそうな表情の方が本来の女の顔のように思えた。この笑顔はフェイクだ。

次にこの女と会うことは出来るんだろうか？とガザは思ったが、口には出さなかった。

ガザはナビで行き先を設定すると、運転をオートに切り替えた。あとは何もなくても、目的地の本部へと連れていってくれる。

運転をするのは好きだが、そんな気分にはなくなったのだ。

リリウムはウィンドウを開けて、顔に風を受けながら目を細めた。

「こんな仕事のあとで、あのタヌキオヤジに報告しなきゃいけないと思うと嫌になる」

少年のように短くカットされた赤毛を風でなびかせながら、憂鬱そうに言った。

「グレインが嫌いなのか？」

ガザは合成麻薬入りの煙草を取り出すと、口にくわえて火をつけ、深く吸い込んだ。

合成麻薬が00・6パーセント含まれているが、トリップしてしまう程のものではないし、依存性もない。しかも合法だ。普通の煙草よりは、リラックスさせる効果があるらしいので、神経が疲れた時に愛用していた。

「グレインだけじゃなくて、ああゆう中年男全員が嫌いなのよ。…私にも一本ちょうだい」

ガザはシガレットケースをリリウムに渡した。

「偏食だ」

「自分でもそう思う。だけど、こればかりはね」

リリウムは、ため息をつくように紫煙を吐きだした。

第一章3

「ご苦労」

ガザ達の上官であるグレインは、彼等が部屋に入ってくるなり、そう言った。

ガザ達は今日使った『仕事道具』を、グレインの傍に控える黒服に渡した。

本部といっても、決まった場所があるわけではない。今日の皆は、とても人が住んでいるとは思えない、古ぼけたアパルトマンの一室だった。

ある時は高層ビルのオフィスだったり、高級ホテルのスイートルームだったり、バリエーションは豊富だ。

「リリウム、君はいい。もう下がってくれ」

リリウムはグレインに挨拶するわけでもなく、睨むように一瞥しただけで、部屋を出ていった。この機関には、上官だからといって、礼儀を重んじる必要は、特にないのだ。

機関といっても、正式名称はない。連邦政府の非公開組織であり、いわゆる、裏を担当する部門であるらしい。

ガザ達の主な任務は、連邦政府にとって邪魔な存在の暗殺。危険な情報を持つ人間の口封じが主な仕事だった。

機関の正式名称が無いので、ガザ達の正式名称も無かった。

しかし、彼等のことを、地球の古語で『dog』と呼ぶ人間が多いので、いつのまにかそれが定着しつつあるらしい。

黒服の男が『仕事道具』の確認が終わって部屋を出ていくと、グレインは口を開いた。

「彼女はとうだ？」

「盗聴してたんだろ？そのままだ」

「君の目から見てどう思うか、聞いているのだ」

ガザは、いつの間にか、自分が口だけ笑っている事に気付いた。何故か、この男と話す時は皮肉げな表情になってしまう。

「俺からの見解が役に立つのかね」

「役に立つから聞いているのだ。何人もいなくなった同僚を見てきただろう？」

彼女にその予兆はあったかね」

「非常にヤバイね。今後、あの女との任務は断りたい。ヘマされるだけでなく、こっちの命も狙ってきそうだ」

グレインはため息を吐いた。

「そうか、暫らく休養が必要だな」

「優しいじゃないか」

「また、欠番が出た。今は一人でも惜しい」

「一人じゃなくて、一匹だろ？」

ガザは自分達の名称、古語の意味を知っていた。

グレインは、何か思い出したように、下品な表情を浮かべると、ガザに液晶パネルを渡した。

「彼女のデータだ。住所も載っている」

ガザはリリウムの経歴の欄を押した。

「軍人でクルスカの戦場でトラブルを起こしてここへ来た。戦場でトラブルをおこしたのは君と同じだ。

君の方が一枚上手だがね」

経歴には、学歴、軍歴、遺伝子情報まで事細かに載っていた。

そして、最後の行に、こう書かれていた。

8人の捕虜への過剰暴行。うち三人殺害。

「担当カウンセラーによると、ある状況下において、過剰なぐらいサディスティックになる事があるらしい。弱腰になる軍人よりはマシだが、これは病気だな」

なにが『なんで、変態の真似事しなくちゃいけないの』だ。自分

が変態じゃないか。ガザは頭の中で罵った。

彼等は、自ら志願して、こんな仕事をしているわけではない。

『dog』は、いわゆる、社会で犯罪を犯した、『使えそうない』連中のリサイクルだった。

死刑かりサイクルかと選択を迫られたら、リサイクルを選ぶのが大半だった。

人権は剥奪。退職も認められない。

連邦の所有物となるわけだが、監視はつくものの、普通の人間と同じように生活ができるし、報酬も良かった。

それでも、男女問わず、自殺や逃げようとする者があとを断たない。

減る一方の犬に、政府は頭が痛いらしく、最近はカウンセリングのサービスまで付くようになった。それは、慰めにすぎなかったが。

ちなみに、ガザは一度も受けたことが無い。自分でも必要ないと思っている。

グレインがリリウムの経歴を付け加えた。

「そのカウンセラーによれば、幼い頃に父親から暴力だけでなく、性的虐待を受けていたらしい。そのトラウマが、トラブルを起こす引き金になったと」

ガザは消去ボタンを押し、液晶パネルを返した。

「ご愁傷様で」

「彼女の治療に必要なのは、若く健全な男の腕だと」

「あんたか、そのカウンセラーがあの子を慰めればいい。俺はゴメンだね。」

「あんたと違って俺は若いかもしれないが、こんな仕事に平気なんだ。健全なわけないだろう」

「ガザはそう言い捨て、部屋を出た。」

第一章 4

靴と服を着替え、アパルトマンを出ると、リリウムが待っていた。

さっきの仕事着、目立たないように作られた、グレーのスーツとは違い、パステルカラーのシャツにミュールと、お洒落に気を遣う若い女そのものの装いで、それらは、赤毛と白い肌によく似合った。

「あのタヌキオヤジから聞いてたんでしょ。私の経歴」

かとうガザはファッションからは程遠い、動きやすいだけが取り柄のなんの面白みもない格好だ。

「聞いた。よく分かったな」

「女のカンよ」

ガザは笑ったが、彼女は笑わずに、怒りを含んだ表情を彼に向けた。

「その後に言ったことも大体見当がつく。あの偽善ぶった、カウンセラーが言ったわ。『あなたに必要なのは心を支えてくれる男性です』って。ふざけるなって思った。あのオヤジが、私にあんたを差し向けようとしたなら、こっちは御免だわ。私はそんなもの必要としていないし、いらない」

吐き出すように一方的に喋り終わると、彼女は街の暗闇に飲み込まれるように、その場を去っていった。

任務が終わった後、ここのバーに行くのは、ほぼ習慣になっていた。

別に珍しいことがあるわけでもない普通の店だ。自宅から近いとゆう理由で通っているだけだった。

あまり、広い店ではないし、酒の種類が豊富なわけでもない。

今、流行している、ホログラムの熱帯魚が店内を泳ぎ回ってはいたが、それはたいしてめずらしいものでもないし、どこにでもある普通のバーだった。

一人でグラスを傾けているといきなり背中を叩かれた。

「相変わらず、シケてんな」

叩かれた背中にはジンジンと痛かった。

「……クガ」

クガは軍にいた頃からの知り合いで、数少ない友人だった。

「家に電話してもいる気配がなかったんで、もしかしたら、と寄ってみたんだ」

屈託なくクガは笑った。

今は退役して、小さな出版社に勤めていた。

元はジャーナリスト志望で、勉強の為に戦場へ出向いたのが間違
ிட்டた。ジャーナリストになるより、軍人のほうが向いていたの
だ。夢は捨てられず、今にいたる。

「また、仕事で遅くなったのか？」

クガはガザの仕事を知らない。彼の解釈では、SPか、何かだと
思っている。

ガザも否定はしなかった。

「そうだ。疲れたよ」

「お前が、軍を辞めて普通に働くとは思わなかった。天職だった。
出世だって約束されていたのに」

「お前だつて」

クガはガザが戦場で起こした事件を知らなかった。それは、彼が
dogになることを承諾してから、『無かった事』になったのだか
ら。

「俺は向いてなかった。

お前を見てそう思った」

「……用があつたんだろ」

クガの用事は、大体見当がついた。女の事だ。

付き合い始めて、二年になり、一年前から同棲もしているが、彼はその女に振り回されっぱなしだった。

ガザはクガの恋人と面識が無い。その女について知っているのは、クガの話の中だけで、嘘つきとゆう事、カンが鋭いとゆう事だけだった。

出会いは、クガの勤める出版社近くの喫茶店で、話かけてきたのは、女の方だった。

女は看護婦だと言った。聞けば、ここから近い、小さな病院に勤めているとゆう。クガが軍隊にいたことを知ると、女は興味を深くした。

そして、今に至るわけだが、だいぶ時間が経ってから、彼女が嘘をついていることが分かった。看護婦だというのは嘘だったのだ。

同棲を始めて二カ月程たったある日。クガは偶然、彼女の勤務先の病院に行くことがあった。

しかし、彼女の姿はなく。彼女の所在を受付けに聞くと、そんな女はいないとゆう返事が返ってきた。

クガが家に帰り、その事を女に問い詰めると、泣きながら、「明日、本当の職業を言うから」と、繰り返すばかりで会話にならず、クガはそれ以上責めるのをやめた。

次の日、女は大学の研究所に勤めていることを明かした。

何故、こんな嘘をついたのかとは聞かなかった。

「女の事だろ、なんて名前だったっけ？」

「フィアだ。いい加減覚えろよ」

「また隠し事か？諦めろ。お前はそういう女が好きなんだよ。願ったりじゃないか」

クガはかぶりを振った。

「違う、そんな感じじゃないんだ。何かに怯えてるって言うか……」

クガは、喋るのをふいにやめ、店の扉の方に目をやった。

そこには、青白い顔色をした女が立っていた。

第一章 5

「…噂をすれば、影だ」

クガは苦笑して、女を呼び寄せた。

「フィアだ。コイツはガザ。キセニアで一緒だった」

「どうも、初めまして」

ガザは挨拶をしたが、女は茫然として何も答えない。クガが心配そうによびかけた。

「気分でも悪いのか？真っ青だぞ」

女は、はっと気が付いたように瞬きをした。

「いいえ、大丈夫。…ただの貧血よ。
初めまして。お話は伺ってます」

ガザはフィアの事を、何食ってるか分からないような女だなと思った。確かに、クガが振り回されることだけあって、綺麗な顔立ちをしていたが、あまり好きにはなれないタイプだった。

華奢で、おくゆかしげであるとか、顔色どうこうの問題ではなく、彼女には生気が無かったからだ。容姿が整っているから、ますます人形じみて見えるし、雰囲気も暗い。こうゆう女は嫌いだった。

「で、なんでまた、ここに来たんだよ」

クガが尋ねると、女は素っ気なく答えた。

「カンよ。なんとなく居そうな気がしたのよ」

「…またかよ」

前にクガから聞いた話によると、彼女のカンはよく当たるとゆう。クガの居場所から、浮気の予兆まで。

ガザがその事を、

「監視されてるみたいで気味悪くないのか？」

と尋ねると、彼は苦笑しながら、

「もう馴れたよ」

と答えた。それに毎回当たるわけでもないらしい。

クガの柔軟性を羨ましいと思う反面、そんな、うっとおしい女、自分なら耐えられないと思ったのだった。

フィアはクガの隣のカウンター席に座ると、アルコール度数の高い酒を注文した。クガが止める間もなく、一気に呷る。アルコールのお陰か顔色は幾分マシになった。

「おいおい、大丈夫か？」

フィアは、クガを無視するかのように、ガザに尋ねた。

「お仕事は何をなさっているの？」

少しの嘘も許さない。

と、語り出すような強い眼差しをガザに向けた。

ガザは、なんだか気味が悪くなるのと同時に、不躰な視線を向けてくる、女に腹が立ってきた。

ガザの不機嫌を読み取ったのか、クガはフィアに言った。

「前に話したじゃないか、知ってるだろう」

フィアは、急に恥じるように俯いた。

「…そうだったわ。ごめんなさい」

それから、女は思い詰めたように口を閉ざした。

ガザとクガは下らない世間話をいくつかしていたが、女は酒を飲むだけで、一言も喋らない。三人の雰囲気は、最悪だった。

ガザは、その居心地の悪さに嫌気がさし、トイレに逃げた。

変な女だ。

クガの女の趣味を疑う。

別に用が足したかったわけではない。合成麻薬の入っていない煙草に火をつけ、ふかしていると、唐突に扉が開き、フィアがするり

と中に入ってきた。

ガザはくわえていた煙草を落とした。

彼女は扉を閉めると鍵をかけた。どうやら、鍵をかけ忘れていたようだ。

「……女子トイレは隣だ」

驚いたガザは、間抜けな事を言ってしまった。

狭い個室に、若い男女が二人。

普段なら、期待してもいい展開なのかもしれないが、そうで無い事は、フィアの顔を見れば明らかだった。

媚を売るような表情も、好意すら読み取れない。色気は皆無と言っている。何かに怯え、震えているようにも見えた。その気がある女が、そんな表情をするわけないのだ。

「あなた、dogなんでしょう。私を殺すの？」

ガザは自分の耳を疑った。何故、こんな女がそんな事を言うのか、dogの存在を知っているのか。

女はすがり付くようにガザの上着を強く掴んだ。

「お願いだから、答えて。それができないんだったら約束してよ。お願い約束して、私を殺さないって約束して」

ガザは、なんと答えればいいのか分からなかった。

ほとんどの場合、ターゲットは任務直前に教えられるし、「dogか？」と尋ねられて、「はい、そうです」と答えられる身の上ではない。

『dog』は、あつてはならない組織であるし、存在は隠さなくてはならないものだからだ。

フィアは、ガザが何かを答えないかぎり、上着から手を離す気は無いらしい。

手を離してもらうには、心にもない言葉を口にするしかないようだ。

「……約束する」

フィアは緊張した表情を和らげると、上着を離し、何事も無かったかのように、トイレから出ていった。

何なんだ、あの女は？

フィアの、容姿に似つかわしくない大胆な行動には驚いたが、それよりも、dogの存在を知る者が、クガの近くにいる事が心配になった。

本部からの命令があれば、自分を守るために、ガザはフィアを殺すだろう。

何と何を優先させるかは明白だった。

第一章 6

ガザは煙草を一本吸い終わると、トイレから出た。

この店のトイレが奥まった所にあることを感謝した。クガからは、ファイアが男子トイレに入っていったのは見えなかったはずだ。いくら友人とはいえ、許せない事はある。『事実』が無かったとしてもだ。

席に戻ると、ファイアの姿はなかった。

「あいつなら、帰ったよ。」

「すまないな。いつもはあんなんじゃないんだ」

クガはもしかしたら、ファイアがトイレに入って行くのを見たのかもしれない。

「最近、変なんだ」

「あの女と付き合うのは、感心しないな」

「お前も言っただろう。俺は、ああゆう掴み所の無い女が好きなんだ」

クガには悪い癖があった。『秘密』が好きなのだ。

『秘密』そのものでなく、『秘密』を保持する人間が好きなのだ。

あえて指摘したことは無かった。おそらく、本人も気付いていないのだろう。

人付き合いの下手なガザとここまで長く付き合っただけで、彼の人の人柄のおかげだけではなく、彼が、本能的にガザの保持する『秘密』に引かれているのではないかと思うことが、しばしばある。

好奇心を持つことは、悪いことではない。しかし、そのせいで身を滅ぼす可能性もあるのだ。

「それに、あいつは俺がいなくちゃダメなんだ」

ガザはため息を吐いた。

「そういう台詞はな、優男が言うから似合うんだよ。そんなゴツイ図体して、そんな事言うなよ。」

それに時代遅れだ。女は男が思ってるほど、男を必要とはしてないぜ」

クガは笑った。

「相変わらずだな。」

「さっきのは違う。俺にあいつが必要なんだ。あいつが俺を必要としてくれる限り」

クガの言わんとしていることは分かった。

男として、守るべきものがあるとゆう事は幸せなことなのだ。雄としての本来の役目であり。それを満たせるのは限られた男だけである。強い雄でなければ、頼ってくる雌はよってこない。

しかし、その事をあえて口にするクガは、自分にそう言い聞かせ

ているようにも思えた。

それに、よく考えれば、クガの口にした言葉は感情の表現が薄い。単に照れているだけかもしれないが、男としての責任や、雄の本能を満たすシステムを語っただけで、クガの気持ちがないのだ。

あの女に疲れてるんじゃないのかと、ガザは思ったが、口には出さなかった。

「お前の恋愛観ってのは動物的なんだな。どっちにしろ、俺はあの女とは、もう会いたくない」

ガザはグラスに浸かっているオリーブを口にした。

「しまった。そんな話するんじゃないかった」

「…何だよ」

「あいつがさ、『ぜひ明日、家で夕飯でもどうですか』ってさ」

ガザはオリーブを灰皿に吐き捨てた。

「勘弁してくれよ」

「あいつ最近変なんだよ。…妙に怯えてるって言うか。それを、お前を家に呼ぶだけで払拭できるなら、容易い事じゃないか。頼むよ」

ガザは今晚で二度目のため息をついた。

「…分かったよ。行ってやるよ。でも、こづいづ事は、こねつきりにしてくれ」

第一章 7

クガと別れた後、ガザが住んでいるマンションに着いたのは、零時を少ししまわった頃だったが、街には絶えず企業や店などの広告ホログラムが浮かび上がり、その間をサーチライトを受けた翼竜達が飛び回る。

深夜でも喧騒渦巻く、繁華街に近い部屋を選んだ理由は、少しでも故郷を忘れたかったからだ。

あの町はぞっとする程、静かだった。

いくら外が騒がしくても、マンションの中に入ると、それが嘘のように静まりかえってしまふ。

このマンションの防音システムは完璧だった。

自分の部屋の前にある、遺伝子情報を読み取るセンサーに生身のほうの右手をかざすと、ドアが開いた。

部屋に足を踏み入れると、リビングにある端末がアラームを鳴らして起動し、照明を付ける前に、モニターの光が暗い部屋を照らした。

この端末が起動するのは、任務が入った時だけだ。

怪訝そうに、眉をひそめながらアクセスすると、立体映像は浮かびあがらず、グレインの声だけが響いた。

「緊急任務だ。明日、1400時にミッション開始」

「おい、昨日の今日じゃないか。ずいぶん急だな」

ガザはdogになって五年になるが、こんな事は初めてだった。

「こっちも混乱している。組織創設時以来だよ」

「メンバーはあの赤毛女じゃないんだろうな」

「悪いがリリウムだ。人手不足でな。残念だが君の意見も聞き入れる余裕も無い」

ガザは舌打ちした。

「本部設置もままならん。今日のアパルトマンをそのまま使っ」

「あの女に伝えとけ。おかしいな真似したら、ブツ殺してやるって」

「分かった、伝えておこう。本来なら任務前に渡すターゲットの資料だが、なにせ時間が無い。今から転送する」

ガザは煙草に火を付け、送られたデータを開いた。

任務遂行場所と殺害方法が書かれたデータが、立体映像で浮かび上がる。

任務遂行場所はDNA研究所の地下一階。

今時、地下にそうゆう施設が作られる事は珍しい。

殺害方法は施設の電力を落とした後、暗闇に乗じて、銃で殺すという、今日の任務に比べたら幾分マシな方法だった。

「これぐらいなら、赤毛女にヒステリーおこされる確率も少ないか……」

ため息をつきながら、ガザは不謹慎な言葉を口にする。

ガザにとって赤の他人の死は、たとえ間近で見るものだとしても、それは毎日、TVから垂れ流される情報と同じだった。

道徳や善悪といった感覚、感情が麻痺している。

しかし、ガザは故郷のカステイユや、キセニアで、もっとひどいものを見てきたのだ。

施設の構造を頭に叩き込みながら、次の項目、ターゲットのデータを開く。

ターゲットは二人。一人は中年の男。もう一人は若い女だった。

その女の立体映像が完全に映しだされた時、ガザは思わず目を疑いたくなった。

ターゲットの若い女。

それが、フィアだったからだ。

第一章 8

粗末な小屋の中だ。

死体がいつぱいだ。

半裸の女が、泣き喚いている。

女の上に、頭を撃ち抜かれた男がだらしなく倒れていた。

死体がいつぱいだ。

女の股からは、血が垂れていた。

返り血なのかな？

乱暴にされたから？

女が何か言っている。

ダメだ。外国語だから分からない。

汎用語を話せよ。俺は必死で覚えたのに。

助けた方がいいだろうか？

でも、ダメだ。もう手遅れだ。

彼女は汚されてしまって、可哀相な赤ん坊を身籠るに違いないか

ら。

ほら、もう腹が膨らんできた。

女に銃を向けてトリガーを引いた。

真っ暗だ。

違う。

ああ、母さんに食事を持っていくんだった。

しわがれた、耳障りな声が聞こえてくる。

「少しでも、外に出した方がいいんじゃないか」

勝手な事、言いやがって。

「これ以上、世間様に恥をさらしたかないね。どっちにしろ、生き地獄に違いない。ああなっちまったほうが、あの娘には幸せなんだよ」

幸せなわけないだろう。だって、こんなにも惨めじゃないか。

「あんな事さえなけりゃ、あの娘だって……ほら、お前、何、突っ立てんだい。早くお行き」

嫌だ。あの部屋に行くのは。

なんで、勝手に足が動くんだよ。あの部屋には行きたくないんだ。

鍵を開けて部屋に入ると、排泄物の臭いがする。

ああ、またやったんだ。掃除するのは僕なのに。

靴がまた汚れた。

なんか揺れてる。

そうだ。上を見なきゃ。

天井の見なきゃ。

見たくない。

見たくないけど。

見なきゃいけない。

規則的なアラームの音が聞こえる。

ガザは目を覚ました。

息が異常なほど、上がっていた。

目に映ったのは、見慣れた天井。水面が揺らめくような照明。厚いカーテンの隙間からもれる陽光。

ここは、キセニアじゃないし、カスティユでもない。夢にまで見た連邦国内じゃないか。

汗でシャツが張り付いて気持ちが悪かった。

「クソッ。何だってこんな時に……」

肩で息をしながら、シャツを脱ぎ捨てる。

なんで、あんな夢見なくちゃいけないんだ。

昼間とはいえ、そのアパルトマンの近くは人通りが少なかった。

「ありがとう。ブツ殺してくれるんですって？」

リリウムは会うなり、そう口を開いた。

「任務出ていいのか？せつかくの休養の機会だったんだろ」

「私達に、拒否する権利はないわよ。それに、動いてたほうが気が紛れるわ。…どうせ逃れられないものならね」

それには同感だった。うじうじ考えるのよりは、体を動かしていたほうがいいのだ。この女は、ガザが思っていたより、神経が丈夫に出来ているらしい。

「今回は変態の真似事なくていいぶんマシ。ただ、消すだけだし」

人をあやめる事を、そう表現する彼女は自分同様、人としての、何かの回線が切れてしまっているのではないかと思った。

それとも、切ってしまわなければやっていけないのか。

赤外線ゴーグルをガザに渡し、赤外線ライトのスイッチを確かめながらリリウムは尋ねた。

「頭のなかに施設の構造入ってる？」

「今更、何聞くんだよ。」

いくら急だとはいえ、一応プロなんだ」

ガザは、プロとゆう言葉を自分自身に言い聞かせた。

「なら、いいわ。先方は私。あんたはバックを固めて。あんたが先歩いちゃ、前が見えない」

ガザは銃と通信機のマイクの点検をしながら、あいずちをうった。

「了解」

昨日は動揺した。今も、もしかしたらショックを拭い切れていないのかもしれない。しかし、体は決まった通りに作業をこなしていた。

リリウムは靴の紐を結び直していたが、顔を上げると、気弱な表情を見せた。

「……これは、個人的なお願ひなんだけど、ターゲットを殺るのは、あんたにやってもらいたい。勝手な言い分なのは分かってる。……自信が無いのよ。ためらってしまうかもしれない」

「…了解」

ガザは、フィアに向けて、銃が撃てるだろうか？と思った。

実際に、任務の遂行場所がクガの家でないと知ったとき、ガザは安心したのだ。

ガザはフィアを殺すことに躊躇しているのではなく、クガの恋人を殺すことに躊躇しているのだ。

フィアの個人の事はどうでもいい。

「あと、2分で1400時。

27区の警備システムダウンまで、あと5分」

端末を操作する、オペレーターの女性型オートマタ《自動人形》
が事務的な声でそう言った。

「行くぞ」

ガザ達はアパルトマンを出て、車に乗り込んだ。

第一章 9

任務遂行地はDNA研究所だった。

一階には、少ないが一般客もいるようだ。しかし、ガザ達が向かう地下施設は、特定の人間しか入れない。

ガザは、普通の勤め人のような、真面目くさいスーツに身を包んでいた。

リリウムも同じように、パンツスーツに身を包んでいたが、支給された、ダテ眼鏡の分厚いレンズが気に食わないらしく『ダサイ』と文句を言っていた。

確かにセンスのない組み合わせなのかもしれないが、きっとそれぐらいが、ここでは普通なのだ。

リリウムは、颯爽と歩きながら、施設を見渡した。

「あと3分程で、施設の電源が切れるわ。」

この研究所って、重要区域が地下にあるのね。電源落ちたら真っ暗じゃない。

一階に通じる扉は一つしかないし……。テロの可能性とか考えないわけ？」

ガザは時間を確認しながら答えた。

「アイシスがそれだけ完璧だって、過信してるんだ」

「まあ、アイシスのおかげで、私たちも楽に任務がこなせるんだけどね」

アイシス

連邦の守護神とも呼ばれている。それは、連邦政府を管理する、コンピュータネットワークの名称。キセニア戦争を終決させる要でもあった。

戦争が始まったのは、35年前。キセニアを中心に、クルスカ、カステイユの三国と連邦が対立したのが始まりだった。

戦争は、すぐに終わると連邦側は思っていた。三国合わせても、連邦との国力の差は、三分の二以上もあったからだ。

だが、その予想は外れた。

連邦にとって、勝利条件は三国の国土を占領することだったが、三国にとって敗北条件は、国民が全滅する事だったからだ。

双方のルールは始めから違っていたのだ。

三国の民は国土を占領されても、決して屈しない。

連邦は、自国で頻繁に起こるテロ、駐屯地ではゲリラにと、長年悩まされる、結果となった。

その悩み、特にテロに終止符を打ったのがアイシスだった。

国のあらゆる、データを管理し、国民の一人一人の遺伝子情報までも把握する。広大なネットワーク。

どうゆう技術を使ったかは、明らかでないが、あの翼竜に仕込まれた『目』や、街のあらゆる場所に設置されたセンサーで、テロリストの居場所さえも、見付けだせるようになった。

連邦のIDを持たないものは直ちに捕らえられ、指名手配中のテロリストは、下手をすれば、あの翼竜の群れに殺された。

そのシステムのお陰で、テロを未然に防ぐ事ができるだけでなく、他の事件の検挙率も上がった。

連邦は、国民に比較的安全な暮らしを提供する事に成功したのである。

アイシスが機能しはじめて、五年になるが、ハッキングされることも、ウィルスに犯されることもない。それ程、アイシスは完璧だったのだ。

そして、ガザ達の任務の殆どが、事前に電警に要請し、アイシスのシステムを利用する事が多い。

一時的にIDを書き替え、警備システムにバグを走らせ、侵入しやすくしてから、任務を行なうのだ。

ようは、アイシスに、これらの違法行為に協力してもらい、『目をつぶって』もらうのだ。

地下施設のゲートまで行くと、リリウムはダテ眼鏡を投げ捨てた。

「やっと、ダサイものともお別れ」

「おい」

ガザがリリウムの行為を咎めるように睨んだが、彼女は気にせず、腕時計で時間を確認していた。

「分かってるわよ。でも、グレインがなんとかしてくれるでしょう？ あんただって、ポータブルジェットで、ダイブしたじゃない。アレ、かなり目立ってたわよ」

「そんな事、真似しなくてもいい」

「何、イラついてるの？」

冷静に言い返されて、ガザは黙った。

施設の電源が切れる十秒前に、リリウムがカードキーを差し込んだ。ガザは赤外線ゴーグルを懐に確認する。

扉が開くと同時に、二人は体を滑り込ませる、とたんに照明が消

えた。

二人は赤外線ゴーグルを素早く装着すると、足音を響かせないように走った。

タイムリミットは5分もない。

廊下では、腰を抜かした職員達が数人、うずくまっていた。壁を探りながら歩く者もいる。

ガザは後ろを確認した。いくら、アイシスで情報操作する事ができても、生身の警備員だけはどうすることもできない。自分達で対処するしかないからだ。

「次の廊下を右に、その突き当たりの部屋だ」

そう指示しながら、ガザはフィアの顔を忘れようとした。

リリウムがターゲットの部屋の扉を開け、ガザが中に入ると、彼女は後ろを警護する態勢に入った。

部屋の中央、病院の手術台のようなベッドにフィアがいた。

人が入ってきた気配に気付いたようで、泣きながら辺りを見回している。

中年の男は、みつともなく震えながら床にうずくまり頭を抱えていた。

最初に殺すのは、フィアの方だ。

そうしなければ、決心が鈍る。

銃口をフィアに向かって構えると、気配に気付いたのか顔をガザの方に向けた。

泣き腫らした目で、ガザを睨む彼女は、別人のように生氣に満ちていた。

「嘘つき」

この暗闇で、何も見えているはずはないが、フィアはガザをしつかりと睨んで、呟いた。

握った銃がカチカチと鳴っている。その時初めて、ガザは自分が震えていることに気付いた。

もしかしたら、ずっと震えていたのかもしれない。

「早く！」

ためらっているガザをリリウムが急かした。時間が迫ってきていたのだ。それに、警備員が来ると、面倒なことになる。

ガザが、固く目をつぶり、トリガーにかけた指に力を込めようとした刹那、通信機から、電子音が鳴り響いた。

音を聞くと同時に、ガザは床に座りこんでしまった。

正確に言えば力が抜けて立っていらなくなったのだ。

その音は、任務中止を知らせる緊急の合図だったからだ。リリウムが腹立たし気に、通信機に応答した。

第一章 10

「本部のミスだったさ。
任務そのものが、間違いだったって」

リリウムは通信機を荒々しい仕草でオフにした。
もし誤って、ターゲットを殺していたら、どんな目にあうか。

施設の電源は回復し、フィアと中年の男以外の職員は外に逃げた。
いった。

ガザは、だらしく床に座り込んだままだった。
気が抜けたせいか、一気に汗が噴き出し、数滴床に落ちる。

「……俺たちは、どうするんだ？」

「このまま、ここにいろつて。今、グレインがこっち向かってる」

「…グレイン？あのグレインか。君らはdogなんだな」

中年の男は、ガザ達にそう尋ね、リリウムが頷くと、フィアに向かっ
て言った。

「…当たったな」

フィアは無言で、中年男から顔をそらし、ガザにタオルを手渡した。
た。

「しかし、いったい、どうゆう目的で、君達はこんなことをしたんだね？」

中年男がリリウムに尋ねると、彼女は面倒臭そうに答えた。

「私達は任務に従ってるだけだから、そんな事、分かる訳がないじゃない」

リリウムの態度に、中年の男は怒りを露にした。

「君らは礼儀を知らんのか！」

「お父さん、静かにして。頭に響くわ」

フィアは冷ややかな声でそう言った。

『お父さん』という言葉から、この中年男はフィアの父親なのだろう。クガとは面識があるのだろうか、とガザは思った。

妙な雰囲気部屋に充滿していた。

ガザは暫らく何も考えたくなかったし、中年男　フィアの父親とリリウムは、違う理由だが、明らかに怒っている。フィアは、何を考えているのか分からなかった。

そうこうしてる間に、グレインが到着し、中年男に頭を下げ謝った。

「キース博士、大変申し訳ありません」

「いったい、どうゆう事なんだね？」

グレインとフィアの父親が三人を残し、部屋の廊下に出ていくのを見計らって、フィアはガザに向かって言った。

「…嘘つきね」

ガザは、人形のように表情がない女がはっした、その表情と同じような抑揚のない声と、うっとおしい台詞に、ため息をついた。

クガが、なぜこんな女と付き合っているのか、理解できない。

「人の事を言える立場か。ここは、大学の研究所なのか？違っただろう？それに殺してない」

ガザの言葉に、フィアは下唇を咬んで俯く。

また、黙るかよ。

ガザは都合が悪くなると、目を逸らしたり、口をつぐむ子供っぽい女にイラついた。

「なんで、クガに嘘ついてまで付き合う必要があるんだ？」

「あなたには関係ないわ」

「関係ないわけないだろう。友達なんだから」

「なんで、男って間柄にこだわるのかしら。『友達だから』ぐらいならまだマシかしらね」

フィアは相変わらず乏しい表情で、そう言った。

「どういう意味だ？」

「あの人も、いつもそう。『男だから、恋人なんだから責任とる』って口癖みたいに言うわ。

：責任とってもらいたいために、私はあの人と一緒にいるわけじゃない。

ねえ、あなた、そうゆう言葉で片付けられる、女の気持ち分かる？」

そんな気持ち、ガザに分かる訳が無かったが、彼の答えは簡単だった。

「そんなこと、俺にぶちまけられたって困る。その台詞はクガ本人に言ってやれよ」

不満があれば、相手にその事を行動なり、言葉でぶつけなければいいとゆう答えは、相手の痛みや立場を知らない者だけが言える台詞だ。

ガザはフィアの立場や感情を理解はしていないし、理解しようともしていなかった。

「どんな理由があるか、知らないけど、クガはお前の嘘に疲れてる。あいつと別れたくないなら、はつきりさせるんだな」

フィアは顔を上げると、はじめてガザをきちんと見つめた。その

表情はとても悲しそうだった。

双方に重たげな雰囲気がまとわりつこうとしたとき、ガザの肩をリリウムが叩いた。

「帰っていいって、どうする？」

「……帰る。疲れたからビール飲みたい」

リリウムは近くにいた黒服の男達が振り向くぐらい、大声で笑った。

「付き合っよ」

ガザは立ち上がり、そのまま部屋から出ようとしたが、フィアに夕飯に招待されている事を思い出した。

「今日は遠慮しとく」

さすがに、殺されそうになった相手を夕食に招待したくはないだろうと、ガザは思ったのだが、フィアは命令するように、強い口調で言った。

「駄目よ。来て頂戴。それと、ルイ・ロデレール社のクリスタル三本買ってきて」

クリスタル、高価なシャンパンだ。それを三本とは。

「あなたもクガも水みたいにお酒呑むじゃない。それぐらい必要でしょう？」

来てくれないなら、クガにあなたに殺されそうになったって言うてやるわ」

ガザは舌打ちしなくなったが、自分も嘘をついたのは事実であるし、クガにその事を言い付けられるのは困る。悪態をつくのを堪えた。

「……わかったよ」

ガザが、渋々答えると、フィアは嬉しそうに微笑んだ。それは、蕾が綻んだような印象だった。

「ありがとう」

ガザはフィアの口から出た意外な言葉と、初めて見た彼女の人間らしい笑顔に驚き、何故か戸惑った。

ガザ達はリリウムの住むマンションの近くにあるピザショップに入り、ビールとピザを頼んだ。

わざわざ、そこまで出かけたのではなく、偶然、今日の仕事場所が、リリウムの借りている部屋から近所だったのだ。

「あの娘、知り合いだったの？」

リリウムはピザをカッターで切り分けながら尋ねた。

「まあね」

「恋人？」

「違うよ。友達の子」

「良かったじゃない。殺さずにすんで。任務中止って、もしかして初めて？」

「何回かあったけど、本部のミスは初めて。ほとんどの原因は他の犬のミス。たまに自分の頭ブチ抜いたり」

「……私は、まだそんなことしないわ」

それは、何となく分かる気がした。

今のリリウムには、消えていった連中がまとう独特のうつとおしさが無い。

それに、今日の任務でターゲットをやる自信が無いとはっきり言った。自分の感情を把握できるうちは安全なのだ。それを見失ったとき、人はおかしくなる。

この女も、おかしくなる時が来るのだろうか？

「男として、聞きたいんだけど、『男だから、恋人だから、責任とる』って言葉のどこがいけないんだ？」

「まさか、あんたが言ったの？」

「あの女に友達が言ったんだってさ」

「そのセリフは最悪。言っちゃいけない」

「そうか？」

「倦怠期丸出しじゃない。責任だの、義務だのって言葉ほど冷たいものないわ」

「なら、なんて言えば気が済むんだよ」

ガザの言葉に、リリウムは呆れたように、ため息をついた。

「いい大人が、そんな事聞かないでよ。自分で考えたら？あんたの友達も最悪だけど、そうやって尋ねる、あんたも相当だわ。」

……話し変わるけど、グレインと、あのフィアって娘の父親キース博士だっけ？二人の話し聞こえた？」

ガザはピザを頬張りながら首を横に振った。

「本部がミスした原因。」

政府からの指令って、アイシスを利用して本部へ送信するでしょ？そのアイシスがハッキングされて、二セの指令を流されてたらしいわ。

議会は大混乱。今、電警が調査中だつて」

「盗み聞きしてたのかよ。趣味悪いな」

「他にやる事ないじゃない。あんたはターゲットといい雰囲気だし」

ガザはビールを吐き出しそうになった。

「そんなんじゃないって」

「でも、あの娘ずっとあんたの事を見てたのよ。気付かなかった？」

「……気付かなかった。でも嫌だ。あんな女。

まだ、お前の方がマシだよ」

ガザはしまったと思ったときは遅かった。リリウムは失言に目ざとく気付き、不敵に笑う。

「あんたに突っ込ませてくれるなら、犯らせあげてもいいわよ」

「……やめろよ、変態」

ガザは口が滑った事を後悔したが、この女と馴れ合うのは、不快ではなかったし、フィアと一緒にいる時の何倍も居心地が良かった。

第一章 11

成り行きとゆうのは恐ろしい。

ほどよい疲労を感じながら、ガザはそう思った。

あれから、おかしな方向へと話が進んだのは、口を滑らせた自分に原因があつた。

だが、例えお互いに張り詰めた緊張感が、緩んだのがきっかけだつたとしても、食欲の次に性欲を満たすなんて、ずいぶん動物的な行動だつた。

つまり、何となく彼女の部屋に行き、何気なく関係を結んだのだ。

いや、違う。何となくじゃない。

リリウムは、実に彼女らしくストレートに、部屋に来ないかと誘つた。

まさか、この年になって『そういう』話の流れの後、女の部屋で待っているのが、お茶と世間話である確率は少ない。何も期待せずに、のこのこついていく男は、そうはいないだろう。

リリウムの部屋は、きちんと片付いてはいたが、女の部屋にしては殺風景だつた。無駄な装飾が一切無い。全て、生活に必要な家具

ばかりだ。

唯一あった小物は、リビングのサイドボードに置かれた、電子ではない、真鍮でできたアンティークのフォトスタンドだけだった。

何が写っているのかは分からない。リリウムが部屋に入ると、真っ先に、フォトスタンドを倒して見えないようにしたからだ。

別に見やしないのに、とガザが言うと、リリウムは黙ってかぶりを振り、あだめいた表情を浮かべると、首に両腕を絡ませて、ぐつと体重をかけてきた。

バランスを崩し、二人の体は後ろにあるソファに倒れかかる。ガザはとっさに両腕で自分の体を支えた。

ガザが押し倒したのではなく、リリウムにそうさせられたわけだ。

リリウムはあの表情を浮かべたまま、首に回した腕にゆっくり力をこめてゆく。

男として、情けない状況であるのに、ガザの中で、弾け痺れるような甘い感触が全身をおおった。

「それ義手？」

隣でシートに包まっているリリウムが、左手に触れながら尋ねた。

「キセニアの駐屯地にいたときに、千切れたから」

「つなげられないくらい？」

「ぐちゃぐちゃに吹っ飛ばされた」

「でも、なんで、わざわざ？クローンから移植すれば良かったのに」

地球に人類が根をおろしていた頃に比べ、医療技術はかなりの発展をとげた。
ホーム

特に、クローン研究や、DNA研究は、目覚ましい発展をとげ、皮膚の再生技術や、内臓や部位の移植など、各方面にわたり貢献している。

多少、内臓を傷つけられ、部位を失っても、処置が早ければ、人はスベアを得る事ができるのだ。

しかし、ガザは、クローンを培養し、そこから移植する事をせず、有機素材の義手の選んだ。

「戦場いた時はこっちの方が便利だったから。見た目も変わらないだろう？」

「でも、体温が冷たい」

「そうか？感覚だってちゃんとあるし、別に不便じゃない」

「そうゆう問題かしら。」

何かおっかないもの仕込んだんでしょ？その左手に」

「まあね」

「何を仕込んだの？」

リリウムも、一応軍人だっただけに、武器には興味があるらしい。
ガザは笑って誤魔化した。

「教えなさいよ」

リリウムはガザにのしかかりながら、ふざけるように体を押しつけてくる。

「あのさ、なんで俺を誘ったんだよ。いらないんじゃないのか」

ガザは話をそらす為に疑問に思った事を尋ね、リリウムは顔を露骨にしかめた。

「そうゆう事、今更、聞けるなんて、あんた、やっぱり最悪」

「デリカシー無いの知ってて誘ったんだろう？その最悪なヤツを誘ったのがどうしてなのか知りたいんだよ」

リリウムはあえて、そんな事を聞くガザを、呆れたように睨んだが、ガザも視線ははずさなかった。

結局、ため息をついて口を開いたのはリリウムだった。

「分かったわよ。降参」

ガザから離れると、仰向けになり、考えるように、天井を見上げた。

「きっと、イライラしてるのを見て安心したから。 それに…」

「それに？」

「…なんでもないわ。忘れて」

「意味が分かんないんだけど」

「じゃあ、聞くけど、なんで、あんたはついてきたのよ？」

「…血の迷い」

「最悪な返答」

「……ついて行かないと、何されるか分からなかったから」

「それは、もっと、最悪」

ブラインドの隙間から、差し込んでいた光が無くなっていることに気付く。フィアとの約束を思い出すと、同時、憂鬱になった。

「……今、何時？」

「19時ちよつと前。もう行くの？」

ガザはベッドから抜け出し、脱ぎ捨てた衣服を拾い上げた。

「約束がある。シャワー貸りるよ」

女の体とゆうものは不思議である。痩せていても、リリウムのよ
うに引き締まった体でも柔らかい。

彼女の白い肌は少し意外だった。強く指で押すと赤く痕がつくほ
ど白かった。

彼女に触れた時に、肌が赤く染まるのを見て、この女がどうゆう
容姿でどうゆう表情なのか、ガザはようやく実感できた。

皮膚が薄く白い肌をしている女だ。

普通に見れば分かる事を今頃になって気付く。

それは、普段、人をきちんと見ていない証拠だった。

見ていないのではなく、興味が無いから、記憶にとどまらないの
だろう。

一人でシャワーを浴びていると、リリウムと過ごした濃密な時間
も、自然に打ち解けて話していた事も、じゃれあっていた事も、嘘

のように消えてしまった。

何で、こんな事になったんだろう？

結局は本能の誘惑に負けたのだと、自分に言い聞かせた。
リウムは突っ込ませてやらなくても、犯らせてはくれたが。 リ

お湯を頭から浴びながら、男としての単純さを呪った。

リリウムと関係を持ったのは、理性的な判断が欠如していたとは思えない。

これで、グレインの思惑通りになってしまった。

だが、ガザはそこまでリリウムをケアしてやろうとは思っていない。彼から見て、彼女もそれを望んでいるようには見えなかった。

服を着てバスルームを出ると、リリウムは素肌にバスローブだけを羽織り、煙草を吹かしていた。

薄暗い部屋でリリウムの白い脚が浮かび上がるのが、少し不気味に思えた。

「じゃあ、お邪魔様」

部屋から出ていこうとすると、リリウムが呼び止めた。

「あんた、犬を辞めたくないの？」

「思った事無い」

「もし、あの娘を殺しててもそう思える？」

ガザは靴の紐を結びなおしながら考えた。いや、考えるふりをした。

「続けられる」

ガザは、リリウムの部屋を後にした。

第一章 12

クガのマンション近くの、ショッピングモールで、フィアに指定されたシャンパンを買い、ガザはクガの住むマンションへと車で向かった。

何回かクガの部屋を訪ねた事はあったが、フィアと同棲を始めてからは、一回も行ったことがなかった。

きつと、内装は、かなり変わっているはず。女臭い部屋になっているに違いない。テーブルには花、テーブルクロスもレースかもしれない。

しかし、三人で何を話せと言うのだろうか。フィアが何を考え、何をしたいのかが、まったく分からなかった。

適当に時間を潰したら、さっさと出ていこう。そうこう考えているうち、マンションに着く。パーキングに車を止め、マンションへと足を踏み入れた。

クガの部屋は確か25階にある。エレベーターのボタンを押し、扉が開くのを待つ。扉は以外に早く開いた。

ガザが、中に入ろうとすると、一人の、紺色の服を来た少女が、エレベーターの隅に座り込んでいる。肩で息をし、ひどく苦しそうだった。

ガザは少女に声をかけるかどうか迷った。彼はそんなに優しくはないし、その少女の表情が明らかにおかしかったからだ。

クスリでもやっているのか、顔を上げ、目は開いているが、何を見つめているか分らない。息は荒く、苦しげなのに口元は笑ったように歪んでいる。少女は見たところ、十一、二歳。世も末だ。

少女の紺色の服は、馬鹿馬鹿しい程、子供らしく、保守的で、上品だったものだった。例えるなら裕福な上流階級の子供が通う、寄宿学校の制服のような印象だ。

そんな身なりなのに、完全にあつちの世界にイッてしまった少女は、ガザの目に、かなり不気味に映った。

ガザは少女を無視する事に決め、エレベーターに乗り込もうとした。

その時になって、少女は、やっとガザの存在に気付いたらしい。

慌てて立ち上がり、エレベーターから出ようとしたが、態勢を崩し、ガザにぶつかった。小柄な少女にぶつかられて転ぶ程、ガザはヤワに出来ていない。

少女は謝りもせず、ガザを見上げて、無邪気に微笑んだ。

少女はガザを押し退けるようにエレベーターから出ると、扉が閉まる瞬間、可愛い声で言った。

「あの女のピューマは役立たずだったわ」

得意げな口調。

少女がいったい何を言いたいのかわからなかった。

ガザが何か言おうとする前に、扉が閉まった。

少女に見覚えがあるのか、妙に引つかかる節がある。ガザは記憶を辿っていたがやめた。25階に着いたのだ。

ガザはそのまま、クガの部屋へと足を向けた。

憂鬱な気分が、足を進める事に大きくなる。

「25018号室」、クガの部屋の前までくると、重いため息をつけてチャイムを押した。しかし、ドアが開く気配が無い。

ガザはもう一度、チャイムを押した。音がするとゆう事は壊れているわけではないようだ。

おかしい。

ドアノブに手を掛けると、なんの抵抗もなく、ノブが回る。ロックが機能していない。

扉が開くと、記憶にある匂いが鼻腔に漂い、体を包みこんだ。

いつも、戦場で嗅いでいたあの匂い。

目の前に広がっていたのは、血の海だった。

第一章 13

「クガ？」

恐る恐る呼び掛けるのがやっとだった。

不愉快な血の匂い。

照明のせいで、部屋の惨状は、しっかりとガザの目に焼き付いた。

リビングは血の海だった。血だけではない。細かになった肉や骨が部屋の床に散らばっていた。

その血肉の水溜まり中にフィアが倒れている。

彼女には四肢が無かった。両腕は刃物で切られたのではなく、腕の付け根から食い千切られたかのように、下半身も腰にかけての部位がない。

そこから、内臓がぐちゃぐちゃになってはみ出ている。クガの姿はなかった。

フィアの見開いた目が、こちらに向けられような気がして、慌て彼女に駆けより跪き、生暖かい血が服にしみ込んだ。わずかだが、フィアはまだ息があった。

「しっかりしろ。何があった。何があったんだ」

訳がわからなかった。何故、こんな事になっているのか。クガはどこにいるのか。

必死に呼び掛けながら、フィアの瞳孔が開いていくのを啞然としながら見つめる事しかできない。

陶磁器のような白い頬に思わず手を添えた。まだ暖かった。

突然、その頬に水滴が落ちた。

それが自分が流した涙だと気付いたとたん、押さえられない激情がわいてくる。

彼女が死ぬことが、世界の終わりであるかのように感じたのだ。死なせてはいけなさと強く思った。

「死ぬな。しっかりしろ。死んじゃ駄目だ」

無駄だと分かっているのに呼び掛ける事をやめられない。

何度も人の死を目の当たりにしても、彼は泣きはしなかったのに、友達の恋人であるだけの女に対して異常な程の執着がわいてきた。この女の暖かさが消えていくのが、我慢できない。

泣き喚きながら、必死に呼び掛けた。

「頼むから、死ぬな死なないでくれ。

誰だ。おまえをこんな風にしたのは、誰なんだ」

フィアのあるはずのない両腕が、ガザの体を引き寄せ、ガザもそのあるはずのない腰に腕を回した。

フィアの綺麗だが寂しげな顔。

それが恐怖に引きつった。

失ったはずの人差し指をリビングの壁に向ける。
クガがそこにはいた。
クガは水の入った風船が弾けるような音をたてて血飛沫をあげながらバラバラになる。

ガザの腕の中にいるフィアが、泣きながら叫んだ。
私の腕！腕！腕！

フィアの右腕が弾ける。次に右足、残った左手も弾け、最後に下半身が弾ける。

フィアは泣き腫らした目で扉の方をにらんだ。

「あの子、あのコピーがやった！
許せない！許せない！殺して、殺してあの子を殺して！」

ガザが扉に目をやる。
そこに立っていたのは、エレベータで見た少女だった。

ガザが見たことのない、白く奇妙な形の銃を持ち、満足気に微笑む。

「おやすみ。フィア、よい夢を」

ガザは激昂して叫んだ。

「あのガキ！」

扉に向かって走り、少女の細い首を締めあげようとしたが、ガザの指は少女を擦り抜け、空を掴む。何度少女をつかもうとするができない。扉を開き、少女は部屋を出ていく。

フィアがガザの体に、あるはずのない腕を後ろからまわし、暖かく柔らかい体を背中に押しつけた。

「ねえ、お願い。あの子を殺してよ。私をこんな目にあわせたのよ。」

コピーのくせに私と大切なクガを殺したのよ。ひどいでしょう?」

そうだ。許されない事だ。お前とクガをこんな目にあわせたあのガキは殺さなきゃいけない。

フィアは今日の昼に見せたような、暖かい人間らしい微笑みを浮かべた。そして、ガザの唇に唇を這わせ、彼は拒むことなくそれを受け入れた。

フィアの熱い舌が口内に入ってくる、ガザは自分の舌をそれに絡ませる。

フィアの作りものめいた、ほっそりとした体や、その整った顔から想像できないほど彼女の中は熱く、その行為がひどく卑猥なものに感じた。

フィアの肌は白く肌理が細かいが、そのせいで陶磁器のような硬質さを感じさせるのだが、触れてみると、肌は暖かくて柔らかい。口内の舌やその粘膜はねっとり熱を孕む。

ガザはフィアと溶けてしまうような錯覚を覚える。
彼女の唇を食ることに夢中になっていると、頭に声が響いた。

ツナガッタ

フィアの暖かかった唇が、急激に温度が失われ、口の中に血の味が広がる。

感じていた、彼女の体温が消えると、彼女に対する執着や愛着は、雪が溶けるように、跡形もなくガザの中から消えた。

唇を剥がし、フィアに目を向けると、ガザが抱いていたのは、手足をもがれたフィアだった。

フィアは我が身を呪うかのような恐怖に引きつった表情を浮かべ、瞳孔が開ききった目で天井を凝視していた。

その瞳には、もう何も映ってはいなかった。

第二章 1

それは、瞬きをする間もなかった。

一瞬、彼の体が膨れたように見えたかと思うと、それは水の入った風船が弾けるような音をたててバラバラになった。血飛沫が上がり、【私】の頬に生暖かいそれがかかる。

足が力をなくし、立っていることさえできなかった。バラバラになった男の体に手をのばしす。

「こんなのってない！ひどい！ひどい！」

クガがクガであるという面影は、その肉片には何も残っていないかった。

それでも彼の肉を血を、腕に抱こうと手を彼の欠けらに突っ込んだ。

「嫌、嫌、ダメだよ、こんなの」

嗚咽混じりに必死に彼を抱く。赤い点の光が、右腕を照らししかと思うと、激痛が走る。

何が起こったのか理解できぬまま、むき出しの細い腕の皮膚に、大きな発疹のような物が無数に浮かび、一瞬にそれらが膨らんでパァンと音をたてて弾ける。骨もろとも木っ端微塵に。

私の腕！腕！

「あんたは楽に殺そうなんて思っていないからね」

激痛に耐えながら、自分にそれを与えた人間を必死に見上げる。
自分にそっくりな少女を。

金褐色の巻き毛を揺らしながら、少女はとても楽しそうに、無邪気に笑った。その様は行動に不似合なほど可憐だった。

「フアナ、あんたは悪魔よ」

「これ、オシリスの新しい兵器。
あんたの男は最大出力でやってあげたわ。あんたと一緒にいただけで、苦しんで死ぬのは可哀相でしょう」

少女は奇妙な形の銃かけた。

「ここだね、出力が調整できるの」

メモリをいじらながら、新しい玩具を友達に見せびらかすよう、自慢げに話す。

「まだコストがかかるし、すぐにエネルギーもなくなるから、戦場に使うには不向きだけど、あんたをやるには充分だわ」

激痛に耐えながら立ち上がり、少女に近づこうとしたが、のろのろと右腕を失った体を引きずるようにして近づく【私】から、彼女はからかうように、軽い足取りで距離をおいた。

「やだ近寄らないで。服が汚れるじゃない」

力一杯声帯を震わせて、叫ぶように声を出した。

「私の細胞から培養されたコピーのくせに！」

「うるさい！」

少女は銃口を足に向け、トリガーを引く。右足が弾ける。バランスを失い、血肉のぬかるみの中に仰向けに倒れた。

叫び声も出ない程の激痛。自分の体が壊れていく恐怖。正気ではいられなかった。目から流れるものが、血なのか、涙なのかも判別がつかない。

ただ、その恐怖と死の予感の中で、今までに無いほど、自分の体をいとおしいと思った。これ以上壊さないで欲しいと思った。

しかし、【私】が命乞いをする間も与えず、少女は残った腕と腰から下を破壊した。

こんな体、こんな自分はさっさと消えてしまえばいいのなんて思っ
て生きていたのに、その願いが叶う間際に、まったく正反対の事を
思う。

【私】はまだ生きていたのだ。こんな所で、こんな娘に壊された
くはなかった。

体が急激に冷えて、意識が遠退いてくる。

駄目だ。駄目だ。私はまだ何もしていない。

おそらく、【私】が死んでも誰も泣いてはくれないだろう。

唯一、泣いてくれる男は先に逝ってしまった。

駄目、駄目、まだ死んだら駄目。私はまだ死ねない何もやっていない。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

歪んだ視界に、あの少女の満足そうな顔が見えた。

「おやすみなさいフィア。よい夢を」

少女は軽い足取りで部屋から出ていく。

もう、消えかかる意識を必死にとどめるのがやっとだった。たとえ死ぬのとしても、一人きりで死ぬのは嫌だった。

ダレカタスケテ、ダレカタスケテ、ダレカタスケテ、ダレカタスケテ、ダレカタスケテ、ダレカタスケテ、ダレカタスケテ

もう、誰にも【私】を助けることはできないと分かっていたても、祈らずにはいられない。願いが通じたのか唐突に扉が開き、部屋の中に男が入ってきた。

「クガ？」

男は確かめるように呼び掛け、部屋の惨状に息を飲む。

その男が誰だったか【私】は必死に思い出そうとした。

あの男。昼間、私を殺そうとした男だ。クガの友達で、本当にどうしようもない男。

男は【私】に気が付き、呼び掛けた。

「しつかりしろ。何があつた。何があつたんだ」

早く父に連絡を取って欲しいと伝えたいのに、喋れない。息もまともにできなかった。

破壊された腰から内臓がずたずたになって飛び出ているのが見えた。手足だけ壊れたなら助かるだろうが、ここまで臓器を破壊されてはどうしようもないだろう。失血も多すぎる。

死を覚悟しながら、それでもあきらめきれず、何かをしようと、頬に手を添え彼の手を握りたつたが、手はとうに失っており、それが叶う事はなかった。

男は自失しているのか、ただ馬鹿みたいに見つめているだけで、
【私】も彼の暗い瞳を覗きこむのがやつとだ。

彼の声が遠くなる。

その時、わずがだが男の中に【私】の『イメージ』を感じた。

あつた。私の場所。

ここに『入れば』いい。

漠然と本能で判断する。

彼の感情はひどく混乱していた。その中に彼が抱く『自分』のイメージを探す。

奥の方にそれはあつた。散らかった引き出しの奥から、一粒の砂

を探すような作業、それを増長させて、表へひっぱり出す。

不愉快な感情が多い。

鉄錆でも口に入っただような、不愉快な感覚。
好意なんてちつとも感じられなかった。

初めて会ったときの、青白い自分の顔。

人形みたいな女。

彼はそう思った。

大切な友人を危険にさらす女。

早く別れさせたほうがいい。

なんて、ひどいことを平気で思う男なのだろう。

次は、あの地下室での泣き顔だ。動揺しつづける男。握った銃が
みつともなく震えていた。

【私】がまともに『生きていた』ときの最後のイメージは？

それは、めったに出ることのない笑顔だった。

【私】がこんな顔で笑うの事を初めて知った。

よかった。

最後の印象がこれでよかった。
これで彼の悪意を許せると思った瞬間、今まで感じた事のない暖か

な気持ちが沸き上がってきた。

警戒を解くと、彼の記憶が流れ込んでくる。

どれも、ひどい思い出ばかり。

可哀相な人。私と同じだ。誰にも愛されてないし、愛していない。裏切りと損得の勘定、頑なに心を閉ざして、他人を拒否し続けている。

美しいものなんて何もない、荒んだ風景。

彼の記憶からは硝煙と蛋白質の焦げる匂いがした。それは死の匂いだ。

死に場所を探すような、危険な事ばかりするくせに、生に対して貪欲だった。

そんな場所に身を置いて死にたくないと思っている。なんで生きているのか分かってないくせに。

育った環境も経験したこともまるで違うが、肉を削ぎ意識だけを感じると、彼は鏡に映した【私】のようだ。

ひどい思い出なのに、【私】は彼の中に、心地よささえ感じた。溶け合ってもいいとさえ思った。

体があれば、彼を抱き締めたいと思った。

それは自分自身を抱き締めたいと思う事と同じようなものだ。

彼は目の前に起こったショックのせいで、ガードが甘かった。

すぐに【私】を受け入れた。

隙を見逃さず、彼の中に取り込む。

【私】は、他人と溶け合う快感に思わず呟いた。

ツナガッタ

第二章 2

ガザは小さな白い部屋にいた。

正確にはいるのではない。閉じ込められている。

人間、ショックな事があると、時間の感覚が無くなる。

ガザはそれを久しぶりに体験した。

ガザは自分でも理解できない不可思議な行動を取った。

フィアが死んでいくのが耐えられなかった。泣き喚き、瞳孔が開いていく彼女に混乱し、彼女とクガの殺された幻影を見て、彼女の唇を必死に貪った。そして、頭の中から声が聞こえた。

ツナガッタ

何に繋がったのか。

やっと自分のした異常に気づき、血の味を感じてまともに戻る。

ガザは自分の身分を考え、連警に連絡する前にグレインに事を知らせた。

「わかった、すぐに向かう。連警にはこちらから連絡しよう」

グレインはそう言ったが、現われたのは、連警や彼ではなく、キース達だった。

キースは部屋に入るなり、膝を付いた。

「……なんて事、なんて事だ。アイシスは何をやってるんだ！」

キースはガザに目をやると、いきなり胸ぐらを掴んできた。

「貴様！自分が何をやったのか解っているのか！
これは国家……いや、人類に多大な損失を食らわせたのだぞ」

キースの隣にいたダークスーツの男が止めに入った。

「博士、落ち着いてください。彼が犯人と決まったわけじゃない」

キースはダークスーツの男を睨みながら、白い服の人間達に指示した。

「そもそも君たち電警が、もっとしっかりしていればこんな事には……
おいボヤボヤするな！遺体の鮮度が落ちる。まだ間に合うかもしれないんだぞ」

キースに指示された白衣の人間達は、金属製の箱の中に『遺体』を拾い上げ、詰め込み始める。中には堪え切れず、嘔吐する者がいた。

それ程、この部屋はひどい有様だった。

人間の原型など留めていない、肉らしき物、骨らしき物が砕かれたようにバラバラに散った中に、フィアの四肢を無くした遺体がぼつりとあった。

顔は綺麗に残っているが、それ以外はひどいもので、砕けた下半身からちぎれた内臓がはみ出している。

「お言葉ですが『彼女』が再度、警告しているにも関わらず、そちらが気を許したせいでの惨事でもあるのですよ。」

『彼女』の所有権を主張し警護を断ってきたのは、博士の方ではありませんか」

「それは、電警がアイシスとの癒着の可能性が有るとみての判断だ」

「心外ですね。そちらの研究所のパトロンはオシリスではありませんか。」

アイシスと癒着の可能性があるのはそちらでしょう？」

キースが思わず言葉を無くした隙に、男はガザに話しかけた。

「口に血がついている」

彼はハンカチをガザに渡した。

「君は、第一発見者であり、確定は出来ないが、殺人容疑もかかっ

ている。

連警とこちらで身柄を拘束する事になるが、弁護士を呼ぶかね？」

ガザは金属製の箱が運ばれていく様子を見ていたが、黙ってかぶりを振った。

拘置所に送られるのかと思ったが、ガザが閉じ込められたのは『特別室』だった。

テーブルを挟んで椅子が二つある。どちらも床に固定されていた。壁にある大きな鏡は、おそらくマジックミラーだろう。

冷静になって考えてみるとキースの嘆き様は、娘を亡くした父親の悲しみからは程遠いものだった。

それに、キースと電警の男の会話は、分からない点がいくもある。

人類の損失

彼女の警告

アイシスとの癒着

ガザが推測したところで分かるはずも無かったが、アイシスはコンピューターネットワークの名称だ。

そんなものに対し、どうやれば癒着できるのだろうか。

オシリスとゆうのは連邦一の大企業の名称で、兵器から娯楽まで、幅広い分野に進出している。

そのオシリスが、キースの研究所のパトロンであるとゆうのは、よくある話だ。別におかしい事ではない。

何故、お互いにむきになり、アイシスとの癒着を指摘しあうのが分からなかった。

それに、自分のとつた不可思議な行動。

クガやファイアがあのエレベータで会った少女に殺された事を瞬時に理解し、彼らが殺されたビジョンを、確かに経験した。

そして、自分にとって、どうでもいいあの女に対し突然の執着が沸く。

彼女が死ぬことに耐え切れず、泣きながら呼び掛け、拳げ句の果て、死体とディープキスをする行動は異常だった。

それにあの声。

ツナガッタ

あれはいつたいたんだっただろう？

キースと話していた電警の男が、二人の部下らしき男を連れて部屋に入ってきた。ガザはボディチェックを受けた後、前向きに手錠をかけられる。

部下が出ていくと、男はガザの向かい側に座り、口を開いた。

「やっと、DNA鑑定で二人の確認が出来た。残念な事だが、君の友人があつた肉片だった。しかし、君がdogと知って驚いたよ」

男はガザに煙草勧めた。
一本取りくわえると、男が火を点ける。

「普段なら君をこうして拘束する必要も無かったのだが、21区の警備システムが何者かの手によってダウン。」

つまり、今まで、完璧に五年間、機能していた、アイシスが、今日で二回も、ハッキングを受けた訳だ」

男は嘲笑うかのような表情を浮かべた。

第二章 3

「アイシスをハッキングした犯人は一応は捕まった。

彼は最近流行りだした、脳に直接端子を埋め込み、ネットに直接アクセスする方法で色々と情報を流していたらしい。

端子はオシリス社のコピー製品。

しかし、彼自身が脳をハッキングされていた。

まあ……操り人形だな。事実、彼を我々が発見したとき、廃人のように端末に接続したまま呆けていた。

意識を取り戻したのはその二時間後だが、昨日ネットにアクセスしてから記憶がまったくない。

彼が言うには、『ある男』に命令されて、指定されたネットにアクセスしたとの事だが、彼は『ある男』の名前も知らない。いや知っていたのかもしれないが……」

「記憶を上書きされている可能性がある？」

「その通り」

電警の男は、皮肉げな表情のまま、言葉を続けた。

「ハッキングにより、21区の警備システムがダウンしたのは、わずか30分だ。その間に彼女達は殺された」

ガザは煙草をテーブルに押しつけて火を消した。灰皿が無いのだ。

手錠を付けたままなので、動かしにくい。

男はよく通る声で話し続ける。

「君は同僚の家を出た後、ショッピングモールでクリスタルを買っている。

高価だが良い酒だ。

趣味がいい。

銘柄は被害者の要望だね？

任務中止後、彼女と君の会話を、傍にいた人間が何人も聞いていた。君の所持品から、レシートと商品があったし、アイシスにもその記録が残っている。

今の所、凶器は見つかっていないが、肉屋や食品工場にある巨大な機械を除いて、人間の体を、骨ごとミンチに出来るような武器は、現在、市場に出てはいない。

10分以内に移動し解体作業の出来る場所で、そのような機械がある施設や店も一件も無い。最短で一時間はかかる」

男はまた、煙草をガザに勧めた。

「凶器は何処だとか聞かないのか？」

ガザのくわえた煙草に火を点けながら、男は苦笑した。

「君は自分を犯人に仕立て上げたいのかい？」

例え鋭利な刃物があったとしてもだ。いくら君でも、二人を10分で、骨ごと解体するのは無理だろう。

私はキース博士のように短絡的ではないし、一介の公務員に過ぎないが、dogの存在を知っている。

君達が嚴重に監視されている事も、監視から逃れるような行動を起こせない事も知っている。

「犯行は君には無理だよ。」

実は彼女達を殺した武器の目星はついていてる。

それは市場には出回ってはいないし、実践投入もされていない。手にするのはわずかな人間だけだ」

独り言のように、男は呟いた。

「何が憎くて、彼女をそんな酷い目にあわせたのか」

彼は手に持っていた液晶パネルをガザに渡した。

「さて、本題だ。」

この中で、犯行現場付近で見た人物がいるかね？」

「この中に、あんた達が目星をつけた容疑者がいるのか？」

男は何も答えない。

ガザは仕方なくデータのファイルを開いた。

年令も性別も人種もさまざまな人間の顔が次々と浮かび上がった。

ガザが、煙草を5本消費し、数百の人物を見終わった頃に、それ

が現れた。

エレベーターの中にいた、あの少女。

幻覚で見た、フィアとクガをバラバラにした少女。

ガザは少女を指で示した。

「マンションのエレベーターにいた。
息を切らして座り込んだ」

ガザは幻覚のことは口にしなかった。
そんな事を言っても電警の男は信じてはくれないだろう。

しかし、何故か、男は確信を獲たように満足気な笑顔を向けた。

「ご協力ありがとう。君は釈放だ。
長い時間すまなかったね」

「もういいのか、仮にでも容疑者だろう？」

「また何かあったら呼び出せばすむ。
君の荷物はロビーの受付にある」

男が合図すると、先ほどの部下達が、現れてガザの手錠を外した。
ガザが部屋を出ていこうとすると、男が呼び止めた。

「ところで、君はシャーマンの存在を信じるかね？」

ガザは質問を無視して、白い部屋を出た。

ガザは、クガとファイアの事を考えようとした。何故だか頭が霞がかったようであり働かない。

あの電警の男は、最後まで自分の役職を明かさなかったが、少々喋りすぎである。

ガザが男の部下から、所持品を返してもらい、腕時計をつけながら文字盤を見ると19時13分。
ガザが拘束されてから丸一日も経っていたのだ。

疲れも感じていないし、時間の感覚は今だに不確かだった。ただ、頭がはつきりしない。それだけだった。

時計から目を上げると、思わぬ人物が視界に入った。鮮やかな赤い髪をした女、リリウムだった。

「なんで、お前がここに居るんだ？」

「呼び出されたのよ。」

あんたのアリバイを証明させられるためにね。

延々とセクハラまがいの馬鹿馬鹿しい質問をされたわ。

あんたのおしりにほくろが何個あったかってね」

おそらく、あの電警の男はガザと会うまでに、事件前の行動を探らせていたのだろう。

そのまま二人は外に出た。

酒瓶の入った紙袋がいやに重く感じる。

リリウムは車で此処に来たらしい。

ガザは身一つで連れてこられたのだから、地下鉄で帰るしかなかった。

「迷惑かけたな」

リリウムに軽く手を振り、別れようとする、彼女は駐車場にある車を顎で示した。乗っていけということらしい。

ガザは指図されるままに、リリウムの車のドアを開け、助手席に座わった。

リリウムは運転席に座ると、黙ってガザを優しく抱き締めてきた。

「おい」

ガザはリリウムの体を押し退けようとしたが、リリウムは離さなかった。

「いいから、黙って」

リリウムの体温を肌で感じると、押し留まっていた感情が一気に溢れだし、熱いものが頬を伝った。

第二章 4

部屋の中に入れた少年は息を飲むと呟くように言った。

「すごい部屋」

この部屋の内装の事だろうか。

「ここに一人で住んでるわけ？」

「そんなものよ。父と二人暮らしだけど、仕事が忙しいから、まったく帰ってこないし」

嘘だ。この家は私だけの為の家だ。父と暮らした事はない。

「二人で住むにはでかすぎるよ。お父さんの仕事は？」

「そんな事どうでもいいでしょ」

それらしい嘘をつくのが面倒でなげやりな返答をする。

引き出しからチェッカーを取り出した。父の調べでは、彼は染色体異常も持病もない健康な少年とらしい。それならチェックは性病だけでいいだろう。少年の口にそれをくわえさせる。

「何これ？」

「儀式よ」

セックスする前の。

後半部分は言わなかった。

《私》は一刻でも早く妊娠して、自由になりたかった。

アラームが鳴り、チェッカーを少年の口から取り出す。問題なかった。

「のこのこついてきて、こんな事聞くのは失礼かもしれないけど、君が登校する度に学校の男子を部屋に連れ込んでるって本当？」

「誰がそんな事言ってるの？」

「みんなが」

「みんなって誰？」

「みんなだよ。君は無垢そうな顔をして、手当たり次第に男と遊んでるって」

「その『みんな』の言う事を信じるの？」

「信じたくないけど、君、学校にあんまり来ないから」

「私があんまり学校に来ないから、私に分らないって事？でも、私の顔と名前ぐらい知ってるでしょう？」

「フィア」

「それで充分よ」

「じゃあ、逆に聞くけど、君は僕の事を知ってるわけ？」

「クラスが一緒だわ」

「それだけ？」

「あと、バスケット部に所属してる」

「今日、初めて口をきいただけなのに」

「じゃあ、あなたはなんでそんなクラスメイトに過ぎない私についてきたの？」

「……それは」

少年は言葉を詰まらせた。

彼に分かるはずはない。《私》がそうさせた。

「私は、前からずっとあなたが気になってた。だからここに連れてきたの」

真っ赤な嘘。でもこの言葉は重要。

しっかりと相手に伝えなくてはいけない。（嘘の）好意を、熱っぽく視線を彼に向けて、真剣に。

「私、学校にはあんまり行ってないけど、先週のあなたが出た試合見たわ」

これも嘘だ。父に渡された、彼のデータを見ただけだ。
少年は顔を真っ赤にさせて、《私》を驚いたように凝視した。

「試合は負けちゃったね。それは残念だった。

他のメンバーは諦めて、だらだら走ってるだけだったけど、あなたはずっとボールを追って走ってた。最後の最後にゴール決めたでしょう」

「一点じゃ追い付かなかったよ」

「チームメイトが悪いのよ」

他のバスケ部員とも寝たかな？と記憶を探ったがやめた。

「試合を見に来てくれてたなら、話しかけてくれればよかったのに」

「だって、とても話しかけていいような雰囲気じゃなかったわ」

嘘、嘘、嘘、試合なんて見てないし、結果と彼の情報しか知らない。雰囲気なんて分かるはずなかった。

それでも彼は、思いあたる節があるのだろう。納得したように、そうかと呟いて、顔をまた赤くさせて一息を吸うと意思を決めたように言った。

「僕もずっと君が気になってた」

意外な反撃だった。

「どうして？」

別に知りたくはなかったし、興味もなかった。

しかし、安全に事を進めるには、ティーンエイジャーのままことみ

たいな恋愛ごっこに付き合う必要はある。

「君はとてもきれいだし」

「それだけ？」

「何て言うか、大人って言えばいいのかな。寂しそうで諦めてる感じがする」

《私》は少しイライラしてきた。この子は《私》の何を知っているのだろう。寂しそう？諦めてる？冗談じゃない。あんた達に比べたら、大人なのかもしれないけど、《私》は寂しくないし、諦めてなんかいない。

相手にするのが煩わしく、早急に事を進める事にする。少年の首に腕を回して、唇に唇を押し付けた。

彼は最初は戸惑って、何が起こったのかよく理解できてない様子だったが、ねじこんだ舌に彼の舌が絡まってくる。

別にこんな事してやらなくてもいいのだ。さつさと事を済ませて、部屋からこの子を追い出したかった。

後ろに、障害物が無いことを確認して重心を後ろに傾けさせる。

徐々に座りこむ形で彼に、自分を押し倒させた。

さつさと始めてくれと、《私》は思ったが、彼は唐突に唇を逃れて、身を起こした。

「駄目だよ」

また意外な反応だった。寝転がったまま、思わず彼を睨んだ。

「なんで？」

いつもなら、それで目的の事が始まるのに、彼はそれをしなかった。

「だって、あんまりにも急展開すぎるよ」

とんだ意気地無し！

ここまできて何もしないなんて。

「こういう事を急ぐ必要なんてないだろう」

別にあんたと恋愛ごっこするのは目的じゃないのよ。とは言えない。

ただ、驚いて、なんだか悔しくて、彼を睨む事しかできなかった。

「女の方がそれを望んでいても？」

彼はじつと《私》を見つめて、悲しそうな、呆れたような顔をするとため息をついた。

「やっぱり、ハンスと寝た事は本当だったんだ」

誰よ、ハンスって。と尋ねる前に誰だったか記憶を探った。他のクラスメイトだったか、それともバスケット部員だったか。

「ごめん。今日は帰る」

彼に潜む、《私》へのイメージをまた引つ張り出そうとした。

彼に潜む、私へのイメージを

彼に潜む、私へのイメージを

彼に潜む、私へのイメージを

彼に潜む、私へのイメージを

少しでも好意や好奇心が残っているのなら、操作する自信はあったが、彼から感じ取れるのは諦めと侮蔑だけだ。ひどく《私》が惨めなものに感じられて、身を起こして怒りに任せて声を上げた。

「ロイ！ロイいるでしょ！この子を捕まえて」

少年は、激昂した《私》を呆然と眺めたが、突然、部屋の扉が開き、屈強な男が入って彼の前に立ち塞がったと同時に、少年は力を無くして床に倒れた。

男の手にはスタンガンが握られており、それによって彼は気絶させられたのだが、本人は自分の身に何がおこったのか、理解できていなかっただろう。

「突然、大声を出すからびっくりしました」

そう言いながらロイと呼ばれた男は少しも驚いているようには見えなかった。

「また、どうして？途中まではいい雰囲気と話していたじゃないで

すか。乱暴されそうになったとか？」

彼はそんなことはしなかった。紳士的すぎただけだった。答えずに黙っていると、男は床に倒れている少年を軽々と荷物でも運ぶように肩に担いだ。

「どうします。本人に気がないなら体外受精でも試してみますか？」

「やめておく」

《私》は床から起き上がると着衣の乱れをなおしながら尋ねた。

「ねえ、どうしてこの子は私に何もしなかったのかしら」

呆れたような表情をみせたが、ロイは答えた。

「そりゃ、理由は色々でしょう。お嬢さんが思ってるほど男は馬鹿でも単純でもないですよ。」

女に強引に迫られてたじろく男は沢山いる」

「あなただったら？」

「俺は願いさげです。博士にバレてこの職を失いたくはないし」

「仕事やお金の事を保証してあげても？」

「お断りします」

そう言つと、彼は《私》を憐れむように、付け加えた。

「きつとお嬢さんがそんな態度だから、この子も気が起きなかったんですよ。お嬢さんと寝るのはお嬢さんの事をどうしてもよく思ってる奴だけです。」

それより、夕飯どうします？

男を連れ込んだから、今日は部屋から出てこないもんだと、賄いのおばさんたちは帰っちゃいましたよ」

「今日はいらない。もう寝るわ」

「同級生をこんな目にあわせたんじゃ、また転校ですね」

「学校なんていってないもの。どうでもいいわ」

そつだ。学校も、この子もどうでもいい。どうせ来月には父が次の種馬を見繕ってくる。

《私》は早く自由にならなくてはならない。

第二章 5

ガザはなんとも表現しようのない不快感で目を覚ました。何か妙な夢を見た気がする。

まだ外は暗く、同じベッドの中でリリウムが静かな寝息を立てて眠っていた。

眠っているリリウムの顔を見ると何故だか少し安心した。

クガはあの様に殺されるべきではなかったとガザは思った。

しかし、彼が取材で戦場へ行き、地雷を踏んで死んだとしても同じ事を思ったのだろう。

自分の存在を、確かめることの出来る人間が一人消えた。

ガザにとってクガは、人間らしくあり続けるための鏡の一つだった。

フィアについては、結局、何も分からないままだった。彼女が何を考え、何故、あんな死に方をしなければいけなかったかも。

フィアはdogの存在を知っていた。

父親のあの嘆き様を見ても、彼女の存在が普通でないことを物語る。

何故、恋人であるクガに職業を偽らなくてはいけなかったのだろうか。

しかし、死人に口は無い。数々の謎を残し、全ては闇の中だ。

この三日間、ガザはリリウムの部屋にいた。

あれこれと世話を焼いてくれるような女ではなかったが、別にガザを追いつ出す気はないらしい。

リリウムの話によれば、彼女と血を分けた家族とは縁が切れているという。

リリウムはガザと違い、連邦の出身である。

ずっと普通ではない育てられかたをされて、十歳の時、彼女の様子を不信に思った大人達の通報で、施設に匿われた。里親に引き取られてからは、『正常』に可愛がられたようだ。

ガザと違い、リリウムは子供の頃、人に優しくされた経験がある。だからガザに優しく接することも出来たのだろう。

ガザは母親に抱かれた記憶が無かった。

だが、それにも関わらず、リリウムは事件を起した。屈折した欲望が、という形で露見し、戦場でトラブルをおこす結果になったかのは、詳しくは語ろうとしなかった。

傷を癒すのは、優しさだけとは限らない。

人は事実から逃げている限り、トラウマを克服することは出来ないのだ。

リリウムも、そしてガザも、自分が逃げていることに気付いていなかった。

「何故、あの二人が殺されなくちゃいけなかったのかしらね」

リリウムは近所の惣菜屋で夕食の為に買ってきたシチューやサラダなどを食卓に並べながら言った。

この三日間、この女が料理をする所をガザは一度も見ることがない。

「こっちが聞きたいよ」

ガザはリリウムから渡された、缶ビールのプルトップに指を引っ掛けながら答えた。正直、ビールよりも何故だか甘いものが欲しくて仕方がなかった。

あまり甘い菓子類は好まない嗜好のだったはずだが、嫌にその欲求が激しい。

リリウムに何か甘いものをはないと尋ねようとしたが、それは気恥ずかしく、食事でも終わった後に自分で買いに行くことにした。

「気付いてるかもしれないけど、私たちが偽の指令でDNA研究所に行かされたのは、陽動だったんじゃないの」

ガザもその事には気付いてはいた。

フィアはひどく怯えていた。何者かに命を狙われているのを、薄々感じて警戒していたのだろう。

犯人はフィアやキース達を油断させるために、ガザ達を使っただのか

もしない。

「仇が取りたい？」

リリウムがガザの顔を覗き込んだ。 彼が答える前に彼女が喋りだす。

答えは聞かなくても分かったようだ。

「あの殺された娘が、あの地下施設で何をしてたか分かる？」

ガザはビールを一口飲み、首を横に振った。

「プライバシーに関わることだから言わなかったけど不妊治療よ」

「何で分かるんだよ」

「置いてある薬と器具で分かったわ。

私の経歴見たなら分かるでしょう。施設に保護されてから、ずっと産婦人科で治療を受けてたんだから。長い間、見てれば嫌でも覚えるわよ。」

私の治療にも使われたことがある物ばかりだった」

ガザは何も答えられなくなってしまった。

「何黙ってるのよ。それとも、私の治療の結果も聞きたいの？」

「いや、いい」

リリウムは少し笑った。

嫌な笑い方だった。自嘲しているようにも見えたし、ガザを嘲笑う

様にも見えた。

「あんたの友達からその事聞かなかった？」

「初耳だ」

しかし、不妊治療なら病院で行えばいいはずだ。何もDNA研究所で行う必要はない。

「私の知ってる事はそれだけ。

……あまり深入りしない方がいいわよ。

これ以上面倒な立場になりたくないのなら」

ガザは黙って、ビールを呷った。

第二章5（後書き）

お知らせ

現在、サイドストーリーの『アルカイツクスマイル』を優先して更新しています。メルジーネの羊水はアルカイツクスマイルが完結してから、更新を再開する予定です。

アルカイツクスマイルの宣伝を少し。

本編から二年ぐらい前の話しという設定です。

バーチャルネットのスクヤンダルが妙な方向へ捻れて「あー…大変だあ」（棒読み）と言うような話です。本編よりセクシャルな表現が多いため、R15で連載させていただいてます。

タグに同性愛とありますが、BLではありません。じゃあ百合的なものかと問われると、……迷います。

私自身では「恋のような執着」だと思って書いてます。「行き過ぎた友情」とも。あれ、それは恋か。ただし「恋愛」ではない。

もし興味があれば、お時間のある時にでも読んでいただけると幸いです。つまり私が個人的に嬉しいです。

ここまで読んでいただいてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3929d/>

メルジーネの羊水

2010年10月8日12時25分発行